



Vol.3

発行 2004年8月
動物愛護ボランティア
《ねこの会》

事務局：TEL/FAX 0263-36-2192

地域ねこ中間報告

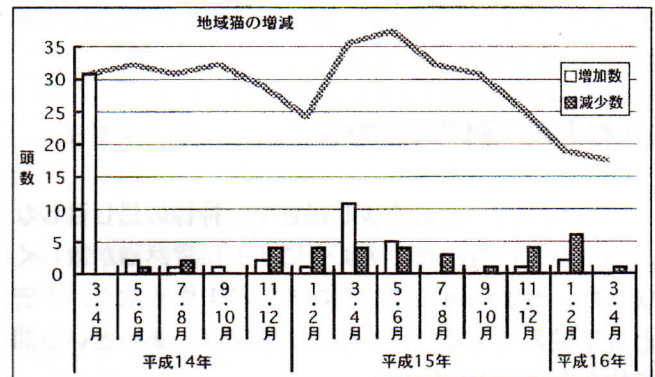
岡田 英二

この「またたび通信」は発刊されて3年が経ちますが、同じ経緯をたどるもう1つの事業があります。県や市、動物愛護会と一緒に取り組み、度々この欄でも取り上げてきた「地域ねこ共生モデル事業」です。

実際に県が起こしたモデル事業は初年度の1年で完了とさせられてしまいましたが、関係各者から「このまま終わらせてしまうのは惜しい」という声が挙がり、どこも厳しい予算の中、知恵を絞りながら方法を模索し、新たな事業を策定するような形で継続を図ってきました。特に長野県動物愛護センター「ハローアニマル」と連携を取りながらモデル地域の猫の管理や調査を行ってきました。地域猫の目的は“所有者のいない猫を適正管理し、繁殖を防止して野良猫数を制御し、地域の猫の数を自然に減少させることで、衛生面や生活環境上の被害・苦情と引取り数を減少させ、人と猫が共生できる豊かな地域社会をつくる”ことです。従って、一番重要なことは繁殖制限になります。地域猫活動は3年目あたりからその効果が現れるのではないかという初めの目論見通り、その緒が著しく出始めたので、例をここに紹介したいと思います。

右に松本のある活動地域の猫の調査結果をグラフにしました。この中の折れ線グラフは猫の総数を示しています。平成14年3・4月期当初に調査へ入った時の猫の数は31頭で、初年度の不妊・去勢手術を開始したのは10月半ばに入ってからでした。およそ4ヶ月に6～8頭の頻度で手術を施し、この中で緊急性の高い猫から優先に手術を行ってきました。緊急性の高さは妊娠中の♀(めす)、発情期の♀、生後6ヶ月を過ぎた妊娠可能な♀、発情期の♂(おす)、手術可能な仔猫の♀♂の順です。1年目の9・10月期までは猫の頭数がほぼ横這いで推移しましたが、冬期に入ってから総数が若干減少しました。これまでの調査から1年を通して猫

が最も増える時季は春から初夏にかけてであり、2年目の3・4～5・6月期には手術が完了できなかった猫の出産や捨て猫によって総数が増えてしまいました。しかし、猫の減る数は季節による変動がほとんどなく、通年でほぼ一定して数頭ずつ減るので春の増殖前に繁殖制限すれば総数が抑制できることがわかりました。猫の数が減る原因は行方不明が最も多く、交通事故、



譲渡、病死の順です。行方不明の猫の追跡調査の結果、多くが交通事故や病死で処理されたことが後に判明しました。屋外で生活する猫にとって最大の危険は交通事故であり、次に感染症であることが推測されます。また、手術で中性化した猫は性格が温和になり、地域住民の理解が浸透し、飼い猫として譲渡されたことも総数減少を助けることになりました。8月現在、この地域の猫の生息数は半数以下の10頭までに減少しました。

地域内の猫は手術がほぼ完了しましたが、やはり猫の増える最大の原因は捨て猫です。捨て猫は犯罪なので警察に取締まりを依頼し、いよいよ捜査が開始されました。地域が一丸となって対策活動をしているにもかかわらず、心ない人の行為が後を絶たないことは残念です。地域猫活動には不妊・去勢手術による繁殖制限の普及が有効であるとともに、捨て猫をさせないための啓発も重要であることを考えさせられました。